


業種	医療機関
活用分野	在宅医療と介護の連携 (情報共有)
テクノロジー	クラウドシステム
端末	スマートフォン、 タブレット 

# 在宅医療と介護の連携を強化! 手元で患者状況を確認し的確な判断を

今後さらに増える高齢者をどう支えていくか——。日本におけるこの重要課題に対して、有効策の1つといえるのが在宅医療＝訪問診療だ。

医療法人社団プラタナスが運営する東京都世田谷区の桜新町アーバンクリニックは、地域に密着した「家庭医」を標榜し、外来診療だけでなく、在宅患者への24時間365日体制での訪問診療にも力を入れている。

院長の遠矢純一郎氏は、「高齢者の在宅支援においては医療だけでなく介護も重要な要素ですから、職種や事業所を越えて情報を共有する必要があります」と話す。

多職種・多事業所間の連携を効率的に行うために同院が企画し具現化したものが、クラウド型の地域医療連携システム「EIR(エイル)」とスマートフォン/タブレットの組み合わせだ。

## スマホの利便性に着目し 患者情報共有を院内から地域へ

もともと同院では、院内スタッフ間の情報共有を図るべく、ノートPCとデータカードでどこからでもリモートアクセスできる環境を整えており、この仕組みを地域の医療・介護連携に応用できないかと考えていた。業務連絡用にiPhoneを使い始めた遠矢氏は、端末の使いやすさ、クラウド利用の利便性などに魅力を感じ、医療業務向けに専用システムを構築しようと思いついた。

同院スタッフの伝手で開発依頼先

もすぐに見つかった。ソフトウェア会社のエイル(福岡県福岡市)は、企業向けのグループウェアやiPhone/iPadアプリを提供しており、そのノウハウを生かしてクラウドシステム「EIR」と端末アプリを短期間かつ低コストで開発した。

「患者さん宅に置いてある連絡ノートの代替として、セキュリティを保持しつつテキストや写真画像などを簡単に入力しアップできるように工夫しました。また、iPhone/iPadに加えてAndroid端末、さらに通常の携帯電話機でも利用できるようインターフェースを作り込みました」と、同社社長の片山嘉國氏は説明する。

## 汎用サービスとしても提供 導入実績はすでに300施設

桜新町アーバンクリニックでは、在宅診療に携わる医師や看護師などがiPhoneを中心とした端末約20台を利用し、常時120～130人の患者に関して、ケアマネージャーや介護ヘルパ

桜新町アーバンクリニック 院長 遠矢純一郎氏(写真右から二人目)、同院 ナースケア・ステーション 事務 北山摂氏(左)、同院 ナースケア・ステーション 薬剤師 大須賀悠子氏(左から二人目)、エイル 代表取締役 片山嘉國氏(右)



ーなど他事業所の担当メンバーとコミュニケーションしている。「患者さんからの緊急コールを受けたときにも、メンバーの書き込んだ情報がよりの確な判断・処置に役立っています」と遠矢氏。また、医師と介護ヘルパーのように会話する機会が少ない職種間のコミュニケーションも生まれ、チームワークの醸成にも効果が現れているという。

さらに「EIR」は、同院での運用と並行してブラッシュアップが進められ、他の医療機関へのサービス提供も開始された。採用実績は全国各地に広がり、すでに約300施設(患者数約1900人)が利用しているという。

図 桜新町アーバンクリニックにおけるIT化と地域医療連携システム

